令和５年度

自己推薦型選抜入学試験

保育学科

課題作文

試験開始までに下記の注意事項をよく読んでください。

試験時の注意事項

① 試験開始の合図があるまで、問題冊子を開いてはいけません。
② 開始の合図の後、解答用紙に氏名・受験番号を記入すること。
③ 解答用紙は横書きで記入すること。
④ 記述解答で、字数の指定がある問題では、句読点やカギ括弧（かっこ）は１字として数えること。
⑤ 下書きは、問題用紙の余白または裏面を使用すること。
⑥ 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせること。
⑦ 試験終了後、この問題冊子は持ち帰ること。

次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

みんなのほうではなく、子どもの目を見る

日本人はよく、「自分の意見がない」と批判されますが、その原因は成長過程における「本質的なコミュニケーション不足」にまでさかのぼれると私は思っています。

日本の子育ての特徴は、何かトラブルが起きても「本質的なコミュニケーション」によって解決する手段を避ける傾向にあるというのが、子どもたちと先生、子どもたちと保護者のやり取りを日々間近で見ている者の実感です。

おおざっぱな比較論ですが、日本人の親子と欧米人の親子を比べたとき、何か悪さをした子どもに対して欧米人の親御さんが“Look at me”と呼びかける光景はとても示唆的です。子どもの目をじっと見つめながら、「わたしの話を聞きなさい」と真剣な眼差しで話している様子を、私は海外に滞在していたとき、また自分の園でも何度も目にしました。

なぜいまの行動に問題があったのか、母親はじっくりと説明するために子どもと向き合います。子どもが反論してくれば、言い分をじっと聞いてやります。そこに「子ども」「大人」という区別はありません。

概して日本の場合は、一方的に子どもを制御しようとする「指導」が目立ちます。しかも、会話の端々に論点を曖昧にする「みんな」という言葉が頻繁に登場します。「ほかのみんなは我慢しているのだから、自分だけ勝手なことをしてはいけません」という具合です。

では、「みんな———」とついいってしまいそうなとき、大人はどうすればよいのでしょうか。私の園では、次の行動にうまく切り替えられない子どもがいれば、いったん立ち止まって「どうしてうまく切り替えられないのか」をまず考えます。遊びの時間が足りなかったのか、切り替えのタイミングが悪かったのか、先生方が反省すべき点も少なくありません。「どうしてやりたくないの？」と、“Look at everybody”ではなく“Look at me”の姿勢で応答的に対話を進めていきます。

時間も手間もかかるやり取りですが、これを繰り返していくうちに子どもは、４～５歳くらいになると集団生活を楽しく送るために自分がすべきこと、すべきでないことの境界が少しずつ見えてくるようになります。周りの目を意識するのではなく、自分がやりたいことと集団がやりたいことの誤差を、またどの程度ならその誤差が許容されるかを、自分の物差しで測れるようになっていくのです（気持ちを切り替えられる年齢には個人差があります。また、フロー体験の有無とも密接な関係があります）。

そして５歳を過ぎる頃になると、自然とお友達の集団で遊ぶようになり、どうすれば彼らと良好な関係が保てるか、知的な意見交換をしながら学んでいきます。これは本能的なものなので、大人は見守り、援助するだけで構いません。

結局、集団行動へ促すことも、みんな一緒というプレッシャーをかけることも、大人

が子どもを管理するうえでの方便で、子どもの協調性や社会性を育てるうえでは何ら関係がないということです。

まずは、「みんな」という“便利な言葉”に頼らないようにすること。真剣に話し合う態度で子どもに接していくこと。そうすれば、大人になったわが子が同調力ばかり強い「自分の意見がない人」になるおそれはなくなるはずです。

（出典：橋井健司（2017）世界基準の幼稚園―6歳までにリーダーシップは磨かれる. 光文社.）

設問　著者が伝えようとしていることをまとめたうえで、その内容に基づいて保育を行う場合、どのように子どもと関わりたいと考えるか。できるだけ具体的に述べなさい。（600字以内）